

「日本文化」は英語でどう表現できるか？

—日本文学の翻訳を通しての一考察—

堀部 秀雄（広島工業大学）

Abstract In teaching English as an International Language, it is often argued that an important goal is to extend learners' ability to express their own culture in the target language. This paper investigates how culture-loaded or culture-specific words and phrases can be aptly translated into English, referring to translation texts of classic Japanese literature. It also discusses pedagogical values of L1-L2 translation exercise in the classroom in the perspective of raising cross-cultural awareness.

1. はじめに

従来の英語教育のパラダイムでは、英語は英米の言語であり、英語を学ぶことは英米の文化を学ぶことだと考えられていた。しかし、20世紀の終わりごろから、英語の世界的な広がりの中で、「国際語としての英語」あるいは「世界諸英語」などの概念が提唱され、広く受け入れられてきている。それらは基本的に「英語はすでに母語話者だけのものではなく、それを使う全ての人のものである」という主張を含んでおり、ここから「英語を学ぶ目的は英米文化を知ることではなく、英語で自らの文化を表現することだ」（例えば Smith, 1983）という考えがでてくる。日本でも、社会言語学者の鈴木孝夫（1975, 1999）が、「日本の英語教育は英語で日本の文化を語れるようになることを目標とするようにパラダイム・シフトをすべきだ」と長年に渡って主張し、この日本文化の英語での発信という考えは現在の文部科学省の指導方針にも散見される。また日本文化を英語で表現するための事典やガイドブックも数多く出版されている（例えば佐藤, 1992; 向井, 2008）。

しかし「英語で自分の文化を表現する」というのは言うほど易しいことではない。「言語と文化は表裏一体」という命題はその言葉の深い意味において真であり、英語という言語は、現在世界でいかに広く使われようと、根本的にいわゆるアングロ・サクソンの文化、生活習慣、価値観などと深く結びついている。したがって、英語という記号にどのような内容を盛ろうとしても、アングロ・サクソンのようなものの見方・捉え方を踏まえなければならない。ならば、「英語で日本文化を表現する」というのは、一種逆説的な、アクロバティック行為であり、少

なくとも「英語文化」と「日本文化」の双方への極めて深い理解と知識が不可欠である。

「日本文化特有の事物・事象および概念」を英語でどう言うべきかを考える大きな手がかりは、日本文学の翻訳の中に見出される。本稿では、近代日本文学の代表的な作品、特に夏目漱石、谷崎潤一郎、川端康成などの作品の翻訳において、「日本的なるもの」がどのように解釈され、表現されているかに注目し、「日本文化を英語で伝えること」の難しさと、そのような難しい作業を通して初めて見えてくる二つの言語・文化の差異を考察してみたい。そこに言語と文化を巡る様々な興味深い留意点・問題点が露呈してくるだろう。このことは、外国語教育論において「訳読」というレッテルで否定的に見られがちな翻訳という作業が言語教育において持つ重要性を深く考えることにもつながるものであり、大学の英語授業での翻訳演習の意義もこの観点から再考されるべきであると私は考えるものである。

2. 流行語の翻訳：「ハイカラ」をめぐる

科学技術の世界では、原語と訳語の1対1対応が可能な場合が多い。例えば「水素」は常に **hydrogen** と訳せばよい。しかし文学作品の翻訳ではこうはいかない。言葉のニュアンスを伝えることの難しさを示す一例として「ハイカラ」を取上げよう。

「ハイカラ」は明治時代に使われるようになった一種の流行語である。もとは英語の **high collar** で、着物の襟に対する「洋服の襟」、要するに「ワイシャツの襟」の意が原義であり、そこから「西洋風」全般を表すようになり、「西洋風の気取った」あるいは「西洋風・現代風の流行を追うような」という揶揄的な含意を持つようになった和製英語の一つである。

谷崎潤一郎の『痴人の愛』(*Naomi*)にはこの語が頻出する。大正末期の東京を舞台にしたこの小説は、西洋人のような、小悪魔的な美女ナオミに主人公の譲治が翻弄される話だが、文芸評論家の磯田光一が『『痴人の愛』は西洋化をめざして生きた近代の日本人にたいする、一種の戯画であり鎮魂歌とさえいえるのではないか』(2007, p. 430)と述べている通り、ナオミがまさに「ハイカラ」であることが、譲治の憧れと拝跪の根本原因であり、そこに西洋的なものに対する日本人のコンプレックスの象徴を見ることができる。('譲治' という名前が **George** と読めるのももちろん作者の企みである。) 主人公自身次のように告白する。(下線は引用者。以下同様)

私が、自分が野暮な人間であるにも拘わらず、趣味としてハイカラを好み、万事につけ西洋流を真似したことは、既に読者もご存知の筈です。(谷崎, 1947, pp.104-105)

Though I had no sense for such things, my tastes ran to the chic and up-to-date, and I imitated the Western style in everything. My readers already know as such.
(Tanizaki, 1985, p. 67)

この小説には「ハイカラ」が上の箇所も含めて16箇所出てくる。もともと英語なのだから、

先祖がえりをして **high-collar** としてもよさそうなものだが、そうはいかない。Anthony H. Chambers はこの 16 を次のように訳している。(1 と 10 は「ハイカラ」が「ハイカラなもの」という名詞として用いられている場合の訳語である。)

1) up-to-date Western fashions	9) sophisticated
2) sophisticated	10) the chic and up-to-date
3) sophisticated	11) chic
4) sophisticated	12) chic
5) modern	13) sophisticated
6) modern and stylish	14) modern
7) modern	15) fashionable
8) modern, sophisticated	16) modern

原義の **high-collar** という訳語は一切使われず、また『ジーニアス和英辞典』に示される **smart** や **dandyish** も使われず、それぞれのコンテキストによる微妙な意味合いを伝えようとして数種類の訳語が使われているのが分かる。確かに **chic** はフランス語から来た外来語であるから、その意味でうまい訳かもしれない。

しかし、私に言わせれば、1)の例を唯一の例外として、肝心の「西洋的な」あるいは「洋風の」という意味合いが出ていないのが不満である。先に述べたように、「ハイカラ」は「近代的な」とか「進んだ」とか「洗練された」というような肯定的な意味合いとともに、「西洋かぶれの」あるいは「新しい流行ばかり追う皮相な」というような否定的な意味合いも持っている。「まあハイカラですね」というのは往々にして皮肉に響くのであり、そのようなニュアンスがこの小説の根本的な風刺性、戯画性を代表しているのである。他の訳書では「あの我儘なハイカラ婆さん」(三島, 1970, p. 80) を“that spoiled, overdressed old woman” (Mishima, 1974, p. 73) としている大胆な例もあるが、Chambersの訳はこのようなニュアンスをほとんど伝えていないように思える。もちろん、私の意図はChambersを批判することではない。このような一言の訳にも、文化的な含意を持つ語を英語で表そうとすることの難しさを指摘しているのである。

さらに言えば、様々な訳語でこの語のニュアンスを伝えようとすることは、どのように工夫しても結局「ハイカラ」というキーワードを消してしまうという皮肉な結果になることも留意しておこう。一つの解決策は **high-collar** と直訳して、脚注で解説を付けることであろう。しかしそのようにしていくと翻訳書というのは脚注だらけになってしまうという問題もある。

3. 生活文化に関する用語：「着物」と「寿司」について

では次に身の回りの「日本的なもの」、特に日本的な衣食住について考えてみよう。「着物」「寿司」「畳」を英語で何というか？答えは、もちろん、kimono, sushi, tatami である。この三つは標準的な辞書には必ず出ている。つまり、すでに英語の中に借入された言葉だと言える。しかし、これらから派生する言葉、あるいは付随する言葉は山のようにある。「浴衣」や「羽織」や「袴」を何というか？「にぎり寿司」や「ちらし寿司」をどういうか？「襖」「障子」「床の間」をどういうか？これらをどう英語にするかはやはり難題である。

例えば「浴衣」を“an informal kimono for the summer season”と説明することは容易だが、翻訳の中でいちいちそのように説明していたのでは、本筋が見失われるだろう。だからと言って yukata とすると、また注釈が必要になる。もう一つのやり方は、「羽織」を half-coat という風に、文化的対応物で表すやり方である。これでいくと、「帯」は belt, 「足袋」は socks, 「袴」は trousers あるいは skirt, 「どてら」は nightgown になる。文学作品の翻訳ではこの方法は広く取られているが、これを続けていくと、ともすると読者が「着物」ではなく「洋服」をイメージしてしまう恐れがあろう。

さらに、「着物文化」には、洋服を着ているとするはずのない様々な所作や習慣が付随する。「抜き衣紋」, 「襷」, 「懐手」を考えてみよう。

3.1 「襟をすかす」「抜き衣紋」

着物には「襟をすかす」という着方がある。これはまた「抜き衣紋に着る」とも言う。着物姿の若い女性が襟をすかして、うなじをあらわにしている姿はセクシーであるが、この感覚は当然着物文化独特のものであろう。

次は川端康成『雪国』(Snow Country)の一節、島村が温泉宿の若い芸者・駒子のけなげな姿を見つめている場面である。

駒子は少し顔を赤らめてうつ向いた。

襟を透かしているので、背から肩へ白い扇を拡げたようだ。(川端, 1980, p. 104)

She flushed a little and looked at the floor.

Her kimono stood out from her neck, and her back and shoulders were like a white fan spread under it. (Kawabata, 1957, p.130)

着物の襟が stand out しているという発想は日本人にはなかなか得られないものであろう。少し誇張があるようにも思われるが、襟をすかしてうつむいている姿を簡潔に視覚的に捉えていると言えよう。

次は谷崎潤一郎の『細雪』(The Makioka Sisters) の冒頭、三人姉妹の長女・幸子が鏡の前で化粧をしている場面である。

「こいさん、頼むわ。ー」

鏡の中で、廊下からうしろにはいつて来た妙子を見ると、自分で襟を塗りかけていた刷毛を渡して、其方は見ずに、眼の前に映っている長襦袢姿の、抜き衣紋の顔を他人の顔のように見据えながら、

「雪子ちゃん下で何してる」

と、幸子はきいた。(谷崎, 1955a, p. 5)

“Would you do this please, Koi-san?”

Seeing in the mirror that Taeko had come up behind her, Sachiko stopped powdering her back and held out the puff to her sister. Her eyes were still on the mirror, appraising her face as if it belonged to someone else. The long under-kimono, pulled high at the throat, stood out stiffly behind to reveal her back and shoulders.

“And where is Yukiko?” (Tanizaki, 1958, p. 3)

これは詳細な描写である。stand out が使われている点は同じだが、「長襦袢姿の抜き衣紋」を表すのに 18 語からなるフルセンテンスが使われている点に留意しよう。文化固有のものを他の言語にしようとする、説明的になり、大変長くなってしまうことを示す好例である。

もう一つの「抜き衣紋」の例を、壺井栄の『二十四の瞳』(*Twenty-four Eyes*) から引こう。小豆島を舞台に一人の女教師と 12 人の生徒たちの絆を描いた作品である。六年生の修学旅行先の金比羅さんで、大石先生は、家が貧しいために小学校を途中で止めて奉公に出て、うどん屋で働いている川本松江にばったり出会う。

日本髪に、ませたぬき衣紋のかわったすがたとはいえ、長いまつ毛はうたがう余地もなかった。

「松江さん、あんた、マツちゃんでしょ。」(壺井, 1957, p.158)

Her Japanese style coiffure and the adult way of wearing her kimono had given her a different look, but her long eyelashes could not deceive Mrs. Oishi's eyes.

“Matsue! Aren't you Matchan?” (Tsuboi, 1983, p. 143)

ここでは「ぬき衣紋」という着方の具体的な描写は一切なしで “the adult way of wearing kimono” という「ませた」という一言を重視した説明になっている。もちろん「大人の着方」というのは「色っぽい着方」という意味だ。確かにここで重要なのは、小学校六年生の女の子が学校にもいけず飲食店で働かされているという点なのである。実際松江は小説のラストの同窓会で再会した大石先生に「わたしはもう先生のまえに出られるような人間ではありませんけれど」と卑下して言う。ここの「ぬき衣紋」はそういう彼女のその後の女性として苦難の時代を暗示しているのであり、ここで訳者は説明を犠牲にして、その象徴的な意味合い

に着目していると言える。もしここで「ぬき衣紋」を長々と説明すれば、文章のリズムは損なわれてしまうだろう。もっとも“the adult way of wearing kimono”で読者が具体的なイメージをつかむことは不可能であろうが。

3.2 「襷をかける」

着物はしばしば袖が邪魔になる衣装である。従って、主婦がてきぱきした用事をする時、あるいは侍が戦う時、「襷をかける」。これを英語でどういうべきか。

次は夏目漱石『門』(*Mon*) の一節である。

御米が襷掛の儘枕元へ来て、・・・(夏目, 1994b, p. 425)

Oyone appeared at his pillow, her sleeves already tucked up for the day's housework, ...

(Natsume, 1972, pp. 66-67)

御米は主人公・宗助の奥さんである。“for the day's housework”という説明がついているところに注意しよう。なるほどこれがなければ十分に理解されないだろう。

同じく『門』から、今度は宗助が禅寺で出会う修行僧・宜道の描写。

(宗助が)縁側へ出ると、宜道が鼠木綿の着物に襷を掛けて、甲斐々々しく其所いらを拭いていた。(夏目, 1994b, p. 590)

Going out to the veranda, he found Gido, with a kind of apron over his robe, wiping down the floor. (Natsume, 1972, p. 197)

これは随分な意識である。なるほど掃除をしているのだから、「エプロンを掛けて」でも同じようなものではあるが、上の例と同じ作品内での同じ訳者の仕事だから、どうしてもわざわざこうしたのかやや理解に苦しむ。僧の着ているのが着物ではなく僧衣=robe だからかもしれない。“with his robe's sleeves tucked up”では分かりにくいと判断したのかもれない。だとすればかなり手の込んだ訳である。

3.3 「懐手をする」

着物を着ていると懐手をすることがある。実際に両手を懐の中に入れてしまう所作だが、比喩的に「自分はなにもしないで人任せにして傍観している」という意味にもなる。

夏目漱石の『明暗』(*Light and Darkness*) の主人公・津田は、漱石の小説の多くの登場人物がそうであるように、一種の人生の傍観者である。

彼は或頭を有っていた。けれども彼には手がなかった。若しくは手があっても、そ

れを使おうとしなかった。彼は始終懷手をしていたがった。 (Natsume, 1994c, p. 63)

He did have a certain intelligence, but he did not have the means of applying it. Even if he did have the means, he chose not to avail himself of it. Literally and figuratively, he always liked to have his hands in his pocket. (Natsume, 1972, p. 33)

訳文ではわざわざ *literally and figuratively* と断っているところが興味深い。また「懷」を *pocket* と訳すのは、上で見た「文化的対応物」の使用の典型例であり、うまい訳ではあるが、主人公が普段家では和服を着ていることが忘れられてしまう恐れがある。むしろ“*keep his hands inside of his kimono*”とやるのがいいように私は思うが、どうだろうか。

3.4 「寿司」について

日本料理の代表である「寿司」についても触れておこう。「握り寿司」を *hand-formed sushi*, 「巻き寿司」を *rolled sushi*, 「ちらし寿司」を *scattered sushi*, またネタ (*topping*) については、トロを *fatty flesh of tuna*, イクラを *salmon roe*, 「カズノコ」を *herring roe* という風に簡単に説明していくことはそう難しくないが、われらが「寿司文化」の奥行きはその程度のものではない。

先に出た谷崎の『細雪』は戦前の関西の上流社会の風俗を活写した点でも大変価値のある長編だが、次のような寿司屋の描写がある。「彼」とは与兵という寿司屋の頑固親爺である。

彼の握るものは、鰐、河豚、赤魚（あこう）、つばす、牡蠣、生うに、比目魚（ひらめ）の縁側、赤貝の腸（わた）、鯨の赤身、等々を始め、椎茸、松茸、筍、柿などに迄及んだが、鮪は虐待してあまり用いず、小鰭（こはだ）、はしら、青柳、玉子焼等は店頭に見せなかった。種は煮焼きしたものを盛んに用いたが、蝦と鮑は必ず生きて動いているものを眼の前で料理して握り、物によっては山葵の代わりに青紫蘇や木の芽や山椒の佃煮などを飯の間へ挟んで出した。（谷崎, 1955b, p. 303）

これを英語に訳しなさいと言われると、いかな英語の達人でもしばし茫然とするのではあるまいか。Seidensticker の訳は以下の通り。

He tried conger eels and blowfish and dace and even oysters and sea urchins, and scraps of halibut or clam, and sometimes red whale meat. Nor did he limit himself to fish: he used mushrooms too, and bamboo sprouts and persimmons. But he was opposed to tuna, that most common of *sushi* ingredients; and scallops and omelettes and the commonplace *sushi* that goes with them were never seen in his restaurant. Though he sometimes cooked his fish, the prawns and abalone were alive and moving when they reached the counter.

(Tanizaki, 1958, p. 293)

留意点として次の5点をあげておきたい。

- 1) 「鮪」に「最も一般的な寿司のネタ」という「寿司文化」になじみのない英語読者のための説明を入れている。
- 2) 「小鰭」と「青柳」は *the commonplace sushi* と一般化されている。またそれが「はしら」と「玉子」につきものだということも訳者の勝手な解釈ではないか。
- 3) omelettes はフランス語の綴りである。英語の omelet ではない感じを出したかったのだろうか。
- 4) 「松茸」と「椎茸」が mushroom という一語で括られてしまうのは日本人としては物足りないが、やむをえないだろうか。
- 5) 原文の最後のところ、「山葵の代わり」云々のところは完全に省略されている。Seidensticker をしても英訳不可能というわけか、それとも「その必要なし」ということか。いずれにせよ、ここを英語読者に分かるように訳そうとすれば多くの説明を要し、その結果読者を退屈させてしまうことはさけられないだろう。すぐれた翻訳者は、多かれ少なかれ、「上手な裏切り者」なのである。

4. 身体部位の日英比較：「頭」「顔」「首」と「腰」

われわれは外部現実を言葉で分節することによって認識している。この分節の仕方は恣意的なものであり、それが証拠に言語によってばらばらである。ここには明らかにその言語の背景にある文化の価値観、興味、関心等が拘わっている。ごく一般的な例を引けば、日本語においては魚の様々な種類を表す語彙が豊富であり、英語では牛肉の様々な部位を表す語彙が豊富である。これが両国の食文化の違いを反映するものであることは自明であろう。

どこの国でも大体同じであるはずの人間の身体の方節の仕方も言語によってまちまちだ。鈴木孝夫は『ことばと文化』(1973)の中で、John Galsworthy の *The Apple Tree* の中の一節 “bearded lips just open” (ひげの生えたくちびるをちょっと開いて) という箇所注目して、日本語の「くちびる」と英語 lips の意味範囲は明らかにずれていることを示している。前者は女性が口紅を塗る部分だけを指すが、後者は「広義には鼻の下、または口の周辺も含む」(『ジーニアス英和大辞典』)のである。そうでないと、上の一節はまことにおかしなことになってしまう。普段は気づきにくい分節の仕方の違いを示す好例である。

4.1 「頭」「顔」「首」

我々の身体のもっと大切な部分の方節の仕方も英語と日本語でかなり違う。「頭」は head, 「顔」は face, 「首」は neck と普通対応させるが、翻訳においてはそうは単純にいかない。研究社の『新英和大辞典第六版』は次のように注釈している。「日本語の『頭』は普通頭髪のあ

る部分をいうので、『窓から顔を出す』のような場合には『頭』とはいわない。しかし、英語ではこのような場合には **head** を用いる。英語の **head** は普通首から上の部分全体をいうので、**face** も **head** の一部である。」つまり英語では **head** は **face** を含んでいるが、日本語の「頭」と「顔」は別の部分をさすのである。一方、日本語の「首」は英語の **head** と **neck** の双方を意味する。従って、「顔」も「首」も場合によっては **head** と訳し、また「頭」は **head** よりも、別の語の単語、例えば **brain** やあるいは比喩的には **mind** と訳されることが多い。

一つだけ例を挙げておこう。次は太宰治の『人間失格』(*No Longer Human*) の冒頭、主人公・葉蔵の写真の描写の一部である。

その写真には、わりに顔が大きく写っていたので、私はつくづくその顔の構造を調べることが出来たのであるが、・・・(太宰, 1952, p. 7)

The head is shown quite large, and you can examine the features in detail: ...

(Dazai, 1981, p. 16).

もしこの「顔」を **face** と訳したら、読者は顔がフレームいっぱい広がっている写真を想像するのではないだろうか。

4.2 「腰」

身体部位に関する語で最大の難物が「腰」であろう。「腰」を英語で言うならとりあえず **waist** か **hips** か **back**, あるいは **lower back** ということになるが、それでことが済むわけではない。日本語の「腰」の意味範囲は大変広い。

安藤貞雄は『英語の論理・日本語の論理』(1986) の中で次のように述べている。「では、なぜ、英語では **waist** と **hips** という切り取り方をし、日本語では『腰』という切り取り方をするのだろうか。それは、我彼の文化の違い求めなければならない。**waist** には『ウエスト周りの寸法』, **hips** には『ヒップ周りの寸法』という意味があるように、両語は<洋服の文化>にとって必要な切り方であるのに対して、『腰』は<畳と着物と座る文化>から必然的に生まれた用語と思われる」(pp. 29-30)。確かに「腰」という言葉は、ちょっと古い日本人の生活様式と結びついてまことに頻繁に用いられる。「腰が低い」「腰が引ける」「腰を入れる」「腰を抜かす」「腰を割る」「腰がくだける」「中腰になる」「腰をうかす」「腰をおとす」、あるいは「腰ひも」「腰ぎんちゃく」「腰の刀」など枚挙に暇が無く、これらを英語にどう訳すか全て難問である。いずれにせよ、**waist** や **hips** という語はほとんど出てこないだろう。

このうちの一つ、「腰を抜かす」を考えてみよう。次は夏目漱石の『坊ちゃん』(*Botchan*) の冒頭である。

親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る。小学校に居る時分学校の二階か

ら飛び降りて一週間程腰を抜かした事がある。＜中略＞ 小使に負ぶさって帰って来た時、おやちが大きな眼をして二階位から飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云ったから、此次は腰を抜かさずに飛んでみせますと答えた。(夏目, 1994a, p. 249)

『坊ちゃん』には 1) Alan Turney, 2) J. Cohn, 3) Umeji Sasaki による三種類の訳がある。該当箇所を引用してみよう。

1) Ever since I was a child, my inherent recklessness has brought me nothing but trouble.

Once, when I was at primary school, I jumped out a second-story window and couldn't walk for a week. (...)

When I arrived home on the caretaker's back, my father glared at me and said, "Whoever heard of anyone shaking at the knees after only jumping from the second floor?" To which I replied that I'd show him. Next time they wouldn't shake. (Natsume, 1972, p. 9)

2) From the time I was a boy the reckless streak that runs in my family has brought me nothing but trouble. Once when I was in elementary school I jumped out of one of the second-story windows and I couldn't walk for a week. (...) When the school custodian carried me home on his back, my old man was furious and said that he couldn't believe that somebody couldn't walk just because they'd jumped out of a second-story window. I told him that next time I tried that jump I'd walk away from it. (Natsume, 2005, p. 13)

3) A great loser have I been ever since a child, having a rash, daring spirit, a spirit I inherited from my ancestors. When a primary-school boy, I jumped down from the second story of the schoolhouse, and had to lie abed about a week. (...) My father, seeing me come home on the back of the janitor, said in an angry tone that no strong boy could be hurt by jumping down from such a low height as from upstairs, and I assured him that he would be proud to see me come out all right next time. (Natsume, 1968. P. 13)

最初の「腰を抜かす」は“couldn't walk” (1, 2), “had to lie abed” (3)という三人同様の発想で訳されているが、あとの2箇所の「腰を抜かす」は1) と 3) においては違った発想で意識されている。3) の例はかなり強引な「一般化」である。興味深いのは、2) で“shake at knees”と訳されている点であろう。普通「腰を抜かす」＝“shake at knees”という連想は出てこないように思えるが、斉藤秀三郎の『和英大辞典』(昭和 54 年復刻版) には、「腰を抜かす」＝“One's knees give way”, 「腰が弱い」＝“weak in the knees” と knees を用いて「腰」が表現されている。さらに『ジーニアス和英辞典』は「彼は腰が抜けて歩けなくなった」＝“His knees crumbled under

himself” という例文をのせている。「立てなくなる」のが「腰」のせいかわ「膝」のせいかわ、医学的には微妙だろうが、“bring beat to one’s knees”＝「(人)を屈服させる；打ちのめす」という表現があるように、英語では knees は急所と考えられているのだろう。さらに云えば、「腰を抜かす」という日本語には、単に「外傷によって歩けない」というよりも「ショックや恐怖によって歩けない」という意味合いが強いのではないか。してみれば坊ちゃんも大怪我をしたわけではないかもしれない。このようなニュアンスを英語でどう表現しうるか、まことに難しいところである。

この他、「腰」の訳し方は千変万化である。いくつかの工夫をみてみよう。次の二つは川端康成の『古都』(*The Old Capital*)の一節である。

「腰に光っているの、なに・・・？」と、千重子がたずねた。

「ああ、うっかりしてた。鎌どす。」(川端, 1980d, p. 360)

“What’s that shiny thing on your belt?” Cheiko asked.

“Oh, I had forgotten. It’s a scythe.”(Kawabata, 1988, p. 106)

なるほど、「腰に刀などをさす」というのは英語では「ベルトにさす」という発想になるのだろう。

「ばあさん、秀男をここに呼んで来てんか。」と、宗助は妻に言った。

「へえ。」妻は膝をはらって、土間におりた。秀男の機まで行くあいだに、握りこぶしで腰をたたいた。(川端, 1980d, p. 278)

“Mother, would you tell Hideo to come here,” Sousuke said to his wife.

“Yes.” She brushed her lap and stepped down into the entry room. As she walked toward Hideo’s loom, she beat the small of her back with her fists to relax the strain of sitting so long. (Kawabata, 1988, p. 42)

畳に座っていたお年寄りが立ち上がってトントンとこぶしで腰をたたくのは、日本人にはおなじみの動作である。しかし椅子と机の文化の人たちには必ずしもおなじみではない。上に出ている“the small of one’s back”とはまさに「腰のくびれた部分」であるが、それをこのように丁寧に表現したところが面白い。さらに興味深いのが“to relax the strain of sitting so long”という原文にはない説明が加えられている点である。何気ない説明の追加に背景文化の相違がよく出ている好例であろう。

もう一つ、村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』(*The Wind-up Bird Chronicle*)の一節。

伍長が命令を下すと、三人の兵隊たちはまず直立不動の姿勢を取った。それから腰を引いて銃剣を前に差し出し、狙いを定めた。(村上, 1995, p. 317)

The corporal barked his order to the three soldiers, who snapped to attention. Then they took a half-step back and thrust out their bayonet, each man aiming his blade at his prisoner. (Murakami, 2003, p. 516)

「腰を引く」=“take a half-step back” というのは日本人にはなかなか思いつかないが、実際に銃剣を持ったつもりで動作をしてみると、同じ姿勢を表していることが実感できる。まったく同じ動作や姿勢を見ても、言語・文化が違うとその着眼点が大きく違うのである。

5. 文化固有の概念語：「義理」と「甘え」

様々な言語の文化的鍵語を研究している Wierzbicka (1997) は「甘え」「遠慮」「和」「恩」「義理」「精神」「思いやり」を日本文化あるいは日本社会を理解するための鍵語として取り上げている。確かにこれらは重要な「日本的」概念であり、日本人の伝統的価値観がそこに色濃く反映されている。これらの概念語は、上でみてきた目に見える事物や事象を表す語以上に英訳が難しいと言えよう。ここでは「義理」と「甘え」と取り上げる。

5.1 「義理」

通常辞書には *duty* あるいは *obligation* などが「義理」の訳語として出ているが、それだけでは「義務」との区別がつかない。斉藤秀三郎の『和英大辞典』(昭和 54 年復刻版)では、*duty*, *honour*, *justice*, *fairness*, *faith*, *regard*, *courtesy*, *decency*, *obligation* (= 恩義), *a debt of gratitude*, (= 浮世の義理), *demands of custom*, *shackles*, *bonds of society*, *ties of friendship* など実に多様な訳語が当てられている。

さらには翻訳の実例で見ると、「義理を欠く」(三島, 1969, p. 279) = “a breach of etiquette” (Mishima, 1973, p. 295), 「義理に縛られることはない」(三島, 1970, p. 147) = “There is no commitment” (Mishima, 1974, p. 132), 「亡父への義理の案内」(川端, 1980b p.9) = “the announcements as no more than formal gestures in memory of his father” (Kawabata, 1967, p. 4) など文脈によって様々な工夫がなされている。考えてみれば、「義理」は極めて重大な言葉でありながら、「義理チョコ」などというように大変安易に日常で多用されている言葉でもある。

再び『坊ちゃん』から引用する。「赤シャツ」の陰謀で同僚の「山嵐」が辞職に追い込まれたことに憤慨し、「坊ちゃん」は校長に自分も辞表を出すという。学校の都合から「君の将来の履歴にも関係するから考え直せ」という校長に、「坊ちゃん」はきっぱり言う。

「履歴なんか構うもんですか。履歴より義理が大切です」

これをどう訳すか？三種類の翻訳を見よう。

- 1) Turney: "I don't care about my career. Justice is more important to me." (Natsume, 1972, p. 162)
- 2) Cohn: "Who cares about my record? Doing what's right is more important." (Natsume, 2005, p. 163)
- 3) Sasaki: "I don't care about my career. To do my duty by a friend is first and last." (Natsume, 1968, p. 178)

三人三様であり、どれがいいかは判断基準によるが、私見を述べておきたい。justice はやはり「正義」の訳語であり、ここではどうも違うという印象を私は持つ。「正義」をパラフレーズした2)も同様であろう。(こういう「言い換えの方略」は大いに学ぶべきだが。)一般に「義理」と「正義」は同一視すべきではない。「義理」のために「正義」に背くことさえありえるからだ。やくざの世界では「一宿一飯の義理」のために人を殺めねばならないことも珍しくない。確かにこの小説の最後で「坊ちゃん」が「赤シャツ」を懲らしめるのは正義感からの行動だとはいえる。しかし、ここではやはり「山嵐」を思う気持ちが先に立っていると見るべきだろう。「義理を果たす」という行為には明らかに自分にとって不利になるという情勢がある。不利になるがそれを犠牲にしても他の人のことを考えなければならないというのが要諦である。こう考えると、やはり3)が最も原意を忠実に伝えようとしていると言えるだろう。つまり、ここでは demand of friendship が「坊ちゃん」の心に強くあると思われ、その意味で by a friend という語句を付加したのは適切な判断であると私は考える。

5.2 「甘え」

土居健郎の『「甘え」の構造』(1971)は、著者の長年の精神科医としての研究から、「甘え」という日本語に相当する概念が西洋語にないことに気づき、それを構造的に分析し、日本文化と西洋文化の根本的な違いを洞察した名著である。

もちろん「甘え」という心情は西洋にも存在する。それは基本的に幼児が母親に対して抱く心情、愛されたいという感情、居心地のよい、温かい親子関係の球体から出たくないという気持ちを表しており、その意味では極めて普遍的である。しかし、土居によると、西洋人と比べて日本人の場合、その心情が長く引きずられて、幼児期・少年期を過ぎたあとでも根強く存在し、他者に対する特異な心的態度を形成しているということである。

かくして、「甘え」という語は日本人の生活のなかで頻繁に用いられ、その意味合いを英語で表現するには難渋することになる。辞書には「甘え」は dependence, 「甘える」は behave like a child, wheedle などと出ているが、それは場合によってはそうなるという例にすぎない。そもそも behave like a child と wheedle では全然意味が違う。wheedle には「甘言で人を欺く」という意味合いがある。また「彼は会社に甘えている」などとなると、どう英訳すべきか、前後関係からよく考えてみなければならない。

川端康成の『山の音』(*The Sound of the Mountain*) は、老いを自覚し、死を見つめるようになった 62 歳の主人公が、自分の放蕩息子の嫁に抱く憐憫と秘められた恋愛感情を中心に、老夫婦と同居の息子夫婦の四人家族の複雑な人間関係を描いた作品である。この四人の微妙な心理には、戦くほどの孤独感と、それ故に絡み付いてくるような「甘え」が綾をなしている。

この小説には「甘える」という動詞が連体形も含めて 10 か所出てくる。このうち一つは「感傷に甘える」で, *become sentimental* と訳されている。これは一つの *phrase* と見るしかない。またもう一か所は,

「菊子はお父さまにあまえているから, あんなことで、涙をみせるんですよ」(川端, 1980c, p. 400)

“You’re too good to her. That’s why she cries over such silly things.” (Kawabata, 1971, p. 146)

というところで、「甘える」が「甘やかす」に転化されて、訳されている。

残りの 8 か所も英訳での品詞はまちまちだが、すべて動詞の形にパラフレーズすると、次のようになる。

1) To coax	5) To take advantage of ~
2) to be coy	6) To be a spoiled child
3) To endear oneself to ~	7) To be coquettish toward ~
4) To beg for affection	8) To be like a small, spoiled child

このようにみると、日本語では同じ「甘える」が英語ではコンテキストに応じて様々に「解釈」されているのがよくわかる。それは場合によって、a) 「媚を売る」であり、b) 「愛情を求める」であり、c) 「(他人の好意を) 当てにする、あるいはそれにつけこむ」であり、また単に d) 「子供のように振る舞う」となる。

ここからさらにいろいろな訳語を考えることができる。a) の意味では *fawn on ~*, *behave coquettishly*, *make up for ~*, b) の意味では *seek affection*, *show affection and seek it from another*, c) の意味では *presume so much on another’s kindness*, *assume the goodwill of others*, *depend too much on ~*, *rely emotionally on ~*, *play upon one’s love*, d) の意味では *be a good little girl (or boy)*, *play baby*, *act like a pampered child* 等々、実に多様な訳例を他の多くの翻訳書に見出すことができる。

このように英語と対照してみると、我々は「甘える」という日本語を様々な意味合いで用いていることに改めて気づかされる。そして異言語・異文化はまさに自言語・自文化を映す鏡なのだと、また改めて認識させられるのである。

6. おわりに：英語教育への示唆

およそ近代に入ってから、外国語教育学の世界では「翻訳」というといわゆる「訳読」を意味し、非効率的な教育・学習法として退けられる傾向が強い。しかし本稿で論じられている文化的差異に焦点を絞った翻訳の捉え方、あるいはその「効用」は、外国語習得の「効率論」とは別次元のものと私は考えている。“intercultural communicative competence”との関連で翻訳を捉える Steifel (2009) は次のように言う。

Literal or true translation between cultures is impossible. What is possible, however, is the creation of an equivalent which is suitable for the target culture. This equivalence is, in essence, a new message created by the translator. (p. 105)

まさに翻訳は創造なのであり、翻訳者は新しいメッセージの作り手なのである。このとはあらゆる翻訳において当てはまることだが、とりわけ文学作品の、特に伝統的な文化に関連した文章あるいは語句の翻訳において最も顕著に意識されよう。

もちろん多くの日本人の英語学習者にとって、日本文学を本格的に英訳するというのは大変困難な作業である。しかし、特に文化的意味合いの強い表現あるいは語句を「英語で言うならどうなるのか」を考えてみることは有意義な刺激になりえよう。それは、言語と文化に関する深い洞察に、またさらには異文化間コミュニケーションの方略の獲得につながっていくものであろう。

私は現在特に翻訳を教えているわけではないが、時折学生に文学作品の一部を翻訳する課題を与えている。大切なことは、出来の良し悪しではない。いかにも直訳できないことを、辞書を頼りに、あるいは人と相談しながら、「要するに、こういうことだから、こんな風に言ってみたらどうか」という訳例を出させ、それを他の学生のものと比較検討し、最後にプロの翻訳家によるものと比較してみる。「なるほど、こんな風に訳せるのか」と感心することが多いが、「こんな無茶じゃないの」「単純化しすぎだよ」とかいう批判も多く出てくる。その過程に大きな意義があると私は考える。

例えば、上で述べた「履歴より義理が大切です」の訳を教室で取り上げたとき、“To meet my obligation for a friend is more important for me than my career.”という訳を示した学習者がいて、議論の対象になった。なるほど、特定の事情から生じた義務は *obligation* の方が相応しいとも考えられる。学習者はそこまで深く考えてこの語を使ったわけではないようだったが、この議論は *duty* と *obligation* の違いは何かという考察につながり、そして「坊ちゃん」のこのときの気持ちはどうだったのかという文学作品の解釈論議にも発展した。さらに、このような検討が、学習者・日本人英語教師・英語母語話者の教師の三者の間でなされれば、極めて有意義な異言語・異文化交流に繋がっていくだろう。コンピュータ翻訳がどれほど発展しようと、

機械では及びもつかないほど深く、知的な興味に溢れた人間的営為がそこにあると私は思う。

またこのことはスピーキングとも無縁ではない。近年の日本ではとにかく「英語がペラペラ」だということがもてはやされる。確かに流暢さは外国語学習の一つの目標であろう。しかし、英語を大変滑らかに話すためには、英語で考え、英語で発想しなければならない。これも「それこそが大切だ」という人もあるが、日本語を母語として育ち、普段日本語で思考している人に「英語だけで考えよ」ということは、「日本的な考え方・発想」を捨て去ってしまえということの意味しないだろうか。普段日本語で考えていることを英語で話そうとすると、我々は必ず口ごもる。口ごもって、心の深いところで翻訳し、英語話者にそれなりに理解できるように表現しようと努力することは、日本人として真に優れた英語話者に、さらに言えば、貴重な *intercultural speaker* になっていく一つの道ではないだろうか。ひたすら流暢に喋ろうとするよりも、二つの言語の間を行ったり来たりしながら、時にはぎこちなく、ぎくしゃくと言葉をつないでいく姿勢も大切にすべきだ。日本語を棚上げしてしまっ、あるいは無理に忘れてしまっ、英語母語話者のマネをするだけの英語学習は、決して学習者の言語文化を、ひいては教養を豊かにするものではないだろう。

けれど、「言語と文化」に関する探究は、外国語学習の最大の楽しみであり、日本文学の英訳はそのような楽しみの宝庫である。そのことを再認識してみてはどうだろうか。

参考文献

- Dazai, O. (1981). *No longer human* (D. Keene, Trans.). Singapore: Tuttle Publishing. (Original work published in 1948)
- Kawabata, Y. (1957). *Snow country* (E. G. Seidensticker, Trans.). Tokyo: Tuttle Publishing. (Original work published in 1937)
- Kawabata, Y. (1967). *Thousand cranes* (E. G. Seidensticker, Trans.). Tokyo: Tuttle Publishing. (Original work published in 1949)
- Kawabata, Y. (1971). *The sound of the mountain* (E. G. Seidensticker, Trans.). Tokyo: Tuttle Publishing. (Original work published in 1949)
- Kawabata, Y. (1988). *The old capital* (J. M. Holman, Trans.). Tokyo: Tuttle Publishing. (Original work published in 1961)
- Mishima, Y. (1973). *Runaway Horses* (M. Gallagher, Trans.). Tokyo: Tuttle Publishing. (Original work published in 1969)
- Mishima, Y. (1974). *The decay of the angel* (E. G. Seidensticker, Trans.). Tokyo: Tuttle Publishing. (Original work published in 1970)
- Murakami, H. (2003). *The wind-up bird chronicle* (J. Rubin, Trans.). London: Vintage Books (Original work published in 1995).
- Natsume, S. (1968). *Botchan* (U. Sasaki, Trans.). Tokyo: Tuttle Publishing. (Original work published

- in 1906)
- Natsume, S. (1972). *Botchan* (A. Turney, Trans.). Tokyo: Kodansha International. (Original work published in 1906)
- Natsume, S. (2005). *Botchan* (J. Cohn, Trans.). Tokyo: Kodansha International. (Original work published in 1906)
- Natusme, S. (1972). *Mon* (F. Mathy, Trans.). Boston: Tuttle Publishing. (Original work published in 1911)
- Natsume, S. (1972). *Light and darkness* (V. H. Viglielmo, Trans.). Tokyo: Tuttle Publishing. (Original work published in 1917)
- Smith, L. E. (1983). English as an international language: No room for linguistic chauvinism. In L. E. Smith (Ed.), *Readings in English as an international language* (pp. 7-11). Oxford: Pergamon Press,
- Stiefel, L. (2009). Translation as a means to intercultural communicative competence. In A. Witte, T. Harden, & A. Ramos de Oliveira Harden (Eds.), *Translation in second language learning and teaching* (pp. 99-117). Oxford: Peter Lang.
- Tanizaki, J. (1985). *Naomi* (H. Chambers, Trans.). Tokyo: Tuttle Publishing. (Original work published in 1925)
- Tanizaki, J. (1958). *The Makioka Sisters* (E. G. Seidensticker, Trans.). Tokyo: Tuttle Publishing. (Original work published in 1947)
- Tsuboi, S. (1983). *Twenty-four eyes* (A. Miura, Trans.). Tokyo: Tuttle Publishing. (Original work published in 1952)
- Wierzbicka, A. (1997). *Understanding cultures through their key words: English, Russian, Polish, German, and Japanese*. Oxford: Oxford University Press.
- 安藤貞雄. (1986). 『英語の論理・日本語の論理』 東京：大修館書店.
- 磯田光一. (2007). 「谷崎潤一郎 人と文学」『痴人の愛』, pp.424-434. 東京：新潮社. (1973 発表)
- 川端康成. (1980a). 「雪国」『川端康成全集第十巻』. 東京：新潮社. (1937 発表)
- 川端康成. (1980b). 「千羽鶴」『川端康成全集第十二巻』. 東京：新潮社. (1949 発表)
- 川端康成. (1980c). 「山の音」『川端康成全集第十二巻』. 東京：新潮社. (1949 発表)
- 川端康成. (1980d). 「古都」『川端康成全集第十八巻』. 東京：新潮社. (1961 発表)
- 佐藤猛郎. (1992). 『英語で紹介する日本文化 キーワード 307』. 大阪：創元社.
- 鈴木孝夫. (1973). 『ことばと文化』. 東京：岩波書店.
- 鈴木孝夫. (1975). 『閉ざされた言語・日本語の世界』. 東京：新潮社.
- 鈴木孝夫. (1999). 『日本人はなぜ英語ができないか』. 東京：岩波書店.
- 太宰治. (1952). 『人間失格』. 東京：新潮社. (1948 発表)

- 谷崎潤一郎. (1947). 『痴人の愛』. 東京：新潮社. (1925 発表)
- 谷崎潤一郎. (1955a). 『細雪（上）』. 東京：新潮社. (1947 発表)
- 谷崎潤一郎. (1955b). 『細雪（中）』. 東京：新潮社. (1947 発表)
- 壺井 栄. (1957). 『二十四の瞳』. 東京：新潮社. (1952 発表)
- 土居健郎. (1971). 『「甘え」の構造』. 東京：弘文堂.
- 夏目漱石. (1994a). 「坊ちゃん」『夏目漱石全集第二巻』. 東京：岩波書店. (1906 発表)
- 夏目漱石. (1994b). 「門」『夏目漱石全集第六巻』. 東京：岩波書店. (1911 発表)
- 夏目漱石. (1994c). 「明暗」『夏目漱石全集第十一巻』. 東京：岩波書店. (1917 発表)
- 三島由紀夫. (1969). 『奔馬』. 東京：新潮社.
- 三島由紀夫. (1970). 『天人五衰』. 東京：新潮社.
- 向井京子. (2008). 『英語で日本のすべてを紹介する事典』. 東京：日本文芸社.
- 村上春樹. (1995). 『ねじまき鳥クロニクル：第3部鳥刺し男編』. 東京：新潮社.